

諸聖人

2015.11.1

マタイ 5・1-12a

毎年 11 月 1 日、教会では諸聖人の大祝日を祭日として祝います。今年は今日 11 月 1 日が日曜日に当たっていますので、今日のミサは諸聖人の祭日の典礼に従ってささげられています。同時に、教会の典礼においては、伝統的に諸聖人の大祝日の翌日は、亡くなられたすべての方々のために祈る死者の記念日と定められていますので、わたしたちの高円寺教会では、今日の諸聖人の祭日のミサで、あわせて、亡くなられたすべての方々、特にこのミサに集っているわたしたちと深い関係にあった、忘れてはならない方々のお名前を祭壇近くに掲げさせていただいて、そのご冥福をお祈りいたします。

諸聖人とは、カトリック教会の公式の聖人伝にはお名前が記録されておらず、したがって、わたしたちはそのお名前を知ることが出来ないけれども、お名前が記されている聖人方と全く同じように、神の栄光のうちに天に上げられた聖人方です。その聖人方を、主イエス・キリストの救いのみわざによって、約束された天の栄光に迎え入れてくださった神をたたえ、諸聖人方とともに喜びのうちに祝うのが諸聖人の祭日です。

わたしたちのカトリック信者の信仰に基づく死生観においては、一人の人の死は、それがどのような形で訪れようとも、その人のいのちを断ち切る、無常で残酷な刃のようなものではなく、神によって与えられたいのちを生き抜いた、その人の地上の人生の到達点です。人間であるかぎり、わたしたちは誰もこのような死を免れることは出来ません。そのような者として、わたしたちはイエス・キリストのみ前に立ち、イエス・キリストが自ら、その十字架の死と復活を通して切り開いてくださった永遠のいのち、復活への展望を、福音として、信仰のうちに受け止めたのです。「わたしは道であり、真理であり、いのちである」と言われる主キリストと信仰によって結ばれた者は、その信仰によって、イエス・キリストがその死と復活によって切り開いてくださった道を通して、この世のいのちの到達点としての死を超えて、イエス・キリストともに、父なる神が迎えてくださる永遠のいのちの喜びに与るのです。そこにこそ、わたしたちの人生の最終目的地がある。これが、わたしたちがカトリックの信者になることによって獲得した、それまでのわたしたちのうちにはなかった、恵みとしての、全く新たな死生観です。わたしたちが受けた洗礼は、イエス・キリストの十字架の死と復活によって、わたしたちの前に開かれた永遠のいのちへの展望を受け入れるわたしたちの信仰の表明であり、イエス・キリストがその教会に与えた秘跡の力によって、わたしたちのいのちを、イエス・キリストご自

身のいのちに分ちがたく結びつける、イエス・キリストをこの世に遣わされた神の愛の恵みをみわざであったのです。

そのような信仰に生きる者たちとして、わたしたちは、わたしたちの人生と切り離すことが出来ない、わたしたちに先立って逝かれた方々のことを思いおこし、その方々のために祈ります。

わたしたちの愛する者の死はわたしたちに深い悲しみを残します。特に、その方が亡くなられて、日も浅いご親族の方にとっては、その方をお見送りすることになった、最後の日々が脳裏から離れることがないでしょう。日が経っても、年が過ぎても、あの日のことを思い出すと、胸が搔きむしられる思いがします。一人の人の死は、特にその人と親しかった者たちにとっては、人生の中で経験する、これ以上にはない衝撃的な出来事です。拭おうにも拭いきれない悲しみの中で、残された者たちが味わう、寂寥感を、孤独感をことあるごとに味わうこととなります。もうその人はいないという、否むことの出来ない現実が、わたしたちの胸に突き刺さって来ます。

そのようなわたしたちが心の平衡を取り戻すことが出来るためには、長い、長い人生の年月が必要です。その年月の中で自分自身も老いることによって、一人の人の死が、その人の人生と結ばれて、わたしたちの心に蘇って来るのを経験します。そうなったときに初めて、その人の死はわたしたちを苦しめることを止め、その人とともに生きた、わたしたちのあの日あの日の懐かしい日々をわたしたちを呼び戻してくれることなのでしょう。今は、墓の中に眠るその人に、生きている人に語りかけるように、悲しみを忘れて、語りかけている自分に気づくことなのでしょう。

このような悲しみの経験を経ることによって、わたしたちは、自分が見出したキリスト教の信仰が告げる、永遠のいのちへの憧れに真実目覚めます。今、わたしたちの心に生きている大切なその人たちが、わたしの生が終わるとき、わたしの死とともに失われてしまわないためには、わたしたちはイエス・キリストが約束してくださった、神のみもとでの永遠のいのちの交わりを必要としているのです。

いつか、わたしたちが年老いて、生と死を隔てる垣根が見えなくなり、死者との語らいを楽しむことが出来る日が来るまで、今はまだ人生の只中にあるわたしたちすべての者も、親しい人との死別の悲しみを乗り越えて、わたしたちにとって、これ以上にはない貴重なその人の思い出に結ばれて、わたしたちの人生を力強く生きてゆくために、わたしたちの信仰そのものである永遠のいのちへの希望を必要としているのです。

今日諸聖人の大祝日、わたしたちの信仰に基づく永遠のいのちへの希望の証人である、今や神のみもとに、永遠のいのちの喜びの交わりにうちにおられる

諸聖人方のとりつぎを願って、わたしたちの愛する死者たちが、わたしたちを愛してくれた死者たちが、諸聖人たちの列に加えられ、永遠のいのちの喜びの交わりに加えられるよう、このミサをささげて祈りたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高